

日本労働年鑑 第28集 1956年版
The Labour Year Book of Japan 1956

第一部 労働者状態

第三編 労働条件

第三章 労働災害と職業病

第二節 炭鉱の労働災害

「昭和二九年一月一二月、鉱山保安統計年報、概報」(通産省鉱山保安局編)によって一九五四年中における炭鉱の労働災害発生状況をみると第119表の通りである。なお、この数字は災害月報の速報集計で、後日追加訂正されることになっている。

同年報によると、五四年の年間累計で、災害回数六二七六四、死亡七〇八、重傷二五、七二二、軽傷三六、八七四と前年に比べて死亡を除いていずれも減少を示すが、死亡者は最近における炭鉱労務者数の減少にもかかわらず五二年以降増加しつづけ、五四年には前年に比べて更に一二名を増加した。従って、稼働延一〇〇万人当り災害率でみれば五三年の六・一一から七・二四へとその上昇が目立っている。

原因別労働災害の発生状況

原因別に災害の発生状況をみると第120表の通りで災害回数の三割、死亡者の半ば以上は坑内における落盤または側壁の崩壊若しくはガスまたは炭塵の爆発によるものである。ことに重大災害の発生状況でみられるように、ガス爆発によってしばしば一挙に多数の死亡者を出し、太平洋炭鉱のガス爆発のごとき死亡者は三九人に上っている。

ついで比重の大きいのは運搬関係事故で災害回数の一三・三%、死亡者の二割を占める。死亡者は少ないが災害回数でこれに次ぐものは取扱中の器材鉱物等のため、飛石または転石、転倒、工具のためというのが比較的高い割合を示す。以上いずれも坑内におけるもので、坑外における災害原因の比率は災害回数で九・九%、死亡六・一%と極めて少ない。

石炭鉱山重大災害調(1954年)

回数	月	日	管内	鉱山名	災害の種類	り災者数			
						死	重	軽	計
1	1	28	札幌	平和第二	足場硬の陥没	5	—	—	5
2	1	28	札幌	茂尻	鉱車逸走	3	1	—	4
3	2	2	福岡	新原	ガス爆発	15	3	1	19
4	2	6	札幌	住吉	ガス爆発	8	—	—	8
5	2	20	福岡	久恒志岐	坑内出水	36	—	—	36
6	2	23	福岡	小城	鉱車逸走	4	1	—	5
7	3	9	札幌	雄別	機械	1	3	4	8
8	4	30	福岡	山犬原	鉱車逸走	1	3	1	5
9	5	3	札幌	蜂の巣	ガス爆発	5	5	—	10

10	5	6	札幌	宗谷曲淵	ガス爆発	—	4	4	8
11	5	8	福岡	相浦	ガス中毒	—	—	19	19
12	5	31	福岡	立川	鉱車逸走	—	6	2	8
13	6	17	福岡	三井田川	運搬	3	—	—	3
14	6	19	福岡	相浦	落ばん	3	1	2	6
15	6	30	福岡	今富	ガス爆発	—	4	2	6
16	7	4	宇部	正安	坑内出水	7	—	—	7
17	7	15	福岡	古賀山	落ばん	3	—	—	3
18	7	28	福岡	第二筑前	ガス爆発	6	—	5	11
19	8	7	札幌	穂別	運搬	—	6	—	6
20	8	31	札幌	太平洋	ガス爆発	39	—	1	40
21	9	1	福岡	小正	坑内出水	4	—	—	4
22	9	7	福岡	小倉	落ばん	3	—	8	11
23	9	29	福岡	万正	落ばん	3	1	—	4
24	9	30	福岡	三池	落ばん	1	2	3	6
25	10	11	福岡	三池	側壁圧出	2	3	4	9
26	11	13	福岡	高松	落ばん	5	—	—	5
27	11	18	福岡	武内宇美	ガス爆発	12	4	—	16

[備考]本表は同時に死亡3名以上、または死傷5名以上を生じた災害である。「鉱山保安統計」による。

日本労働年鑑 第28集 1956年版

発行 1955年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2002年3月5日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1956年版(第28集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)